

## 人生の風に息吹かれて

香山剛神父

28年位前になるが、神学一年生の時藤沢にある修道院で年の黙想があり一週間を過ごした。

午前中に講話があり、昼食後から夕方のミサまで時間があつたので湘南海岸まで散歩する機会に恵まれた。

夏の季節が過ぎた九月初旬の延々と続く湘南の砂浜は静まり返り、ただ波の寄せる音だけが響いてくるのだった。

何かに誘われるように座り込み眺めれば、眼前ではどこまでも広がる太平洋に圧倒され海辺の砂浜に一人取り残されて、そこに「ある」中に溶け込むかのようになった。

31歳で東京カトリック神学院に入学し（人によれば入院というが）黙想会の中で大自然との出会いの時も含めて人生の風に息吹かれて「今」、「ここに」招いてくださつたありがたい導きを知ることになる。

夏のエネルギーが衰退してゆく静寂の中で寄せては戻り、戻っては寄せる波の動きと夏から秋に向かって吹き抜ける微風を感じながら時間が経過してゆく。

ふと少し離れた波間に目をやると風を求めて操作している帆付きサーフボードが見えた。

吹き付ける風を利用して自分の意志通りに動こうとするのだが風がないのだ。

思い通りゆかない人生の現実の中でもがき続ける人間の姿かもしれない。

息吹く風にお任せする以外にない無力な人間に与えられた「今」という時間は、当時私という30代に達した一人の男性の予想を超える不思議なそれであった

「風は思いのままに吹く。

あなたはその音を聞いても、それがどこから来てどこへ行くかを知らない。

霊から生まれたものもその通りである。」（ヨハネ 3, 8）

霊の風（聖霊）を通して働かれる主イエスの導きを人生の風として感じる時、風を自分の意思通りに操ろうとするのではなく風に委ねる時、「今」しかない人生の有難さ、不思議さを知るのではないだろうか。